

訳者あとがき

本書は、*Antoine Compagnon, Comptissez-vous Brunetière ? Enquête sur un antidreyfusard et ses amis*, Seuil, 1997 の全訳である。

「ブリュヌチエールをご存知ですか？ ある反ドレフュス主義者とその友人たちについての調査」という原題が示すとおり、ドレフュス事件百周年を記念する行事が相次いだ原著刊行当時にあつて、フェルディナン・ブリュヌチエール（一八四九—一九〇六）の名前は、ほとんど忘れ去られていたにちがいない。かろうじて記憶されているとしても、それは一九世紀末から二〇世紀初頭の世紀転換期に『ルヴュ・デ・ドゥー・モンド』（両世界評論）誌を率いた保守派の論客のひとり、あるいはコンパニオン自身が一九八三年の『文学史の誕生——ギユスターヴ・ランソンと文学の第三共和政』（邦訳水声社、二〇二〇）で活写したランソン（一八五七—一九三四）よりもさらに前の世代の文学史家のひとりとしてであっただろう。講壇文学史の創設者であったランソンの影にすっかり隠れ、忘れられたこの文人は、しかし、その複雑な人間性によって、ランソン論執筆のあとも長く、コ

ンパニヨンの関心を惹きつけていた。その関心の結実が本書である。

もはや顧みられることのない人物を忘却の彼方から呼び戻し、膨大な資料を読み解きながら、その人物の活動を時代の文脈のなかに置きなおして、今一度、正当に再評価するという「肖像」の技法は、コンパニヨンの得意技ともいえるものである。出世作となった『文学史の誕生』自体、原著刊行時にはほとんど忘却されていた「旧批評」の権化たるギュスターヴ・ランソンを第三共和政の大学制度史のなかに置きなおして再評価する野心的な試みであったが、ランソン論から十数年を経て刊行された本書、そして、ナチス・ドイツによる占領期にフリーメーソンの弾圧を指揮した国立図書館長の姿を、その青年期にまで遡って克明に描いた『ベルナル・ファイ』〔原題 *Le cas Bernard Fay*〕〔ガリマール、二〇〇九〕において、コンパニヨンの肖像の筆遣いはさらに力強さを増しているように思われる。『ブリュヌチエール』においてはドレフュス事件期、『ベルナル・ファイ』においてはドイツ占領期という、いずれもフランス史上、国民を分断した危機の時代にあつて、その後の歴史によって負の烙印を押された文人を敢えて「調査」の対象に選び、彼らに関する「ミクロの歴史」に分け入っていくコンパニヨンの筆遣いには、行き過ぎた単純化を正そうとするバランス感覚——もう少し強い言い方をすれば、人物の歴史的な評価の不正を正そうとする、ある種の正義感——が感じられるときがしばしばある。

たとえば、本書の序論で、ハンナ・アーレントの『全体主義の起源』におけるドレフュス事件に関する記述に対するレーモン・アロンの批判が紹介されるとき、アロンによる批判はそのままコンパニヨンの立場を代弁するものだろう。ヒトラーによる「最終的な解決」を目指したショアーの悲劇を経たあとでは、反ユダヤ主義のレッテルは、歴史を遡って過去の時代の現実を捨象し、アナクロニズムに適用される傾向が強いという偏向に対する慎重な警戒、そして、高みから眺めれば単純至極に見える事柄も、歴史の細部に立ち戻るやいなや、複雑かつ不明瞭な姿を現すことへの十分な理解——コンパニヨンの執筆姿勢を決定している基本方針を要約すれば、そういうことになるだろう。そうした「ミクロの歴史」から見えてくるのが、本書の場合であれば、志操堅固な共和主

義者にしてなおかつカトリック教徒であることを公言したブリュヌチエールという人間の姿である。また、『ペルナル・ファイ』では、前年に同じガリマルから刊行された歴史家マルチヌ・プーランの著作『略奪された書物、監視された読書』（二〇〇八）で完膚なきまでに断罪された国立図書館長ファイが、戦前はむしろ開明的なアメリカ研究者であった事実に着目することによって、ファイという人物の矛盾に満ちた複雑な人間性と、ファイを利用したナチスのインテリ将校たちの姿が活き活きと浮き彫りにされている。

さて、本書には、ブリュヌチエールと並んで、もうひとりの主人公がいる。「ユダヤの女」、フロール・サンジエ（一八二四—一九一五、旧姓ラティスボンヌ）である。コンパニヨン自身が書いているとおり、フロールという魅力的な人物とブリュヌチエールとの交流、二人の往復書簡、フロールが生まれ育ったラティスボンヌ家の壮大なファミリー・ヒストリーがなかったならば、本書は書かれることがなかっただろうし、仮に書かれたとしても、読者を巻き込む「サーガ」の要素は大きく減じていたことだろう。本訳書でおよそ百頁にもわたる註は、「歴史の世界」叢書の一巻をなす原著が手堅い文献学的実証主義に基づく学術書であることを示すものであるが、テキスト本文において、一九世紀のユダイズムとカトリシズムと共和主義の三つ巴の歴史が、フロールとブリュヌチエールという二人の個人の人生を通してダイナミックに描きだされている点に、読み物としても興味深い本書の価値と意義があることはまちがいないと思われる。

二〇二四年八月 訳者